

本論文は、『源氏物語』を主な考察の対象として、物語がいかにかことばを用いて物語世界を構築しているかについて、物語の長編化、書写と異文、物語享受と制作における、ことばの機能と解釈に関して考察を試みたものである。

第Ⅰ部では、物語の続編を書き継ぐ際に重要と思われる「語脈」という手法について、『源氏物語』を中心に考察した。語脈とは、『源氏物語』において見出された手法で、同一の語句が物語内にかけがえなく繰り返されることにより、物語の背景に一定の脈絡が形成されることをいう。語脈を見出すことにより、人物の特性にとどまらず、人物ごと・小話ごとの類似や対照の構図が先行研究により明らかにされてきた。第Ⅰ部においては、人物・小話の類型性・対照性、ひいては主題の継承・発展を見出す手段として語脈を捉えた。考察の対象としたことばは、形容詞「めやすし」である。

形容詞「めやすし」は、従来、世間体の良さなどの社会的な評価を表す、消極的評価の語という理解がなされ、また特に考察の対象とされることがなかった。第一章では、「めやすし」の黎明期である『うつほ物語』『落窪物語』『蜻蛉日記』における用例群を検討し、当初この語が世間体の良さというよりは自分（あるいは自分の近い他者）の目から見た評価を表していたということ、また本来は単に欠点がないことを指す語であり、消極的評価を表すものではなかったということの二点を析出した。

第二章以降では第一章をふまえつつ、物語における「めやすし」の反復が主題性にいかに関わっているかについて考察した。第二章では、『うつほ物語』第二部・第三部から『源氏物語』玉鬘十帖への流れを考察した。『うつほ物語』において「めやすし」は、流離・零落した女君（妻）の再会譚、すなわち女君が苦難を経て再度の幸運に巡り合うという物語の鍵語として機能していたことを明らかにした。一方、玉鬘十帖は「めやすし」の反復を引き継ぎつつ、この語を人物同士の対比構造を示すことばに発展させている点、それを娘の再会譚および幸運な結婚を象る物語の鍵語に発展させていた点を見た。

第三章においては、『源氏物語』第二部において、皇女の結婚という主題が「めやすし」の語に負わされていることを明らかにしつつ、不幸な運命を辿った女三宮・落葉宮姉妹、良好な夫婦仲が変化してしまった夕霧・雲居雁夫妻の物語を読み解いた。しかし、第三部の竹河巻で再び反復された「めやすし」を追うことで、不幸になった玉鬘大君と、かつては不幸でも幸福になった真木柱という対照の構図を見出した。そして、先行する第一部・第二部との鍵語の共有や人物造型の類似から、玉鬘の幸運や落葉宮の救済をも読み解き得た。

第四章では、宇治十帖の中君・浮舟にまつわる「めやすし」を考察した。この二人の物語においては、男女関係を拒否する文脈で「めやすし」を用いる落葉宮からの流れをまずは確認した。中君物語においては、周囲からの幸い人としての評価と当人の心情との乖離を表すのにこの語を反復する意義があったと考えた。続く浮舟物語では、中君の苦悩や、母中将の君の価値観を相対化し、浮舟の心情と母の願望との相違を浮き彫りにする役割を負っていたのが「めやすし」であったと考察した。さらに、入水を決意した浮舟の蘇生・出家が語られる手習・夢浮橋巻では「めやすし」の語が一例も見られないことから、『源氏物語』は「めやすし」を女君の結婚にまつわる鍵語として扱ってきたということとともに、本作品が最終的には女君の結婚による救済に関心を失ったと結論付けた。

第Ⅱ部では『源氏物語』の視点の問題として、敬語表現と形容動詞「きよら／きよげ」について考察した。第一章および付論では、薫、浮舟に対する待遇表現を分析することで、まずは『源氏物語』が語り手視点や登場人物視点を自在に用いて物語世界を構築していることを確認した。また、第一章では竹河巻の様々な齟齬が物語世界の多面性を示すために仕組まれた意図的な方法であったこと、また付論では、待遇表現の不安定な浮舟という女君が、さすらう女君、見つめられる女君であり、また深く思料する女君でもあると、彼女の特性を明らかにした。

第Ⅲ部では、『源氏物語』におけることばの享受について、物語の書写と物語制作を連動させて考察することを試みた。第一章では、第Ⅰ部で取り上げた「めやすし」が、平安後期物語や中世王朝物語にいかに取り入れられているかについて考察した。『夜の寝覚』と『狭衣物語』においては、『源氏物語』の方法を受け継ぎつつ主題を表す鍵語としてこの語を発展させていることを示した。中世王朝物語では、『源氏物語』の「めやすし」を踏襲しているさまを分類した。これらの作品の分析を通して、「めやすし」が男女の恋愛や女君の結婚というテーマを負う鍵語として『源氏』以後の作品においてさらに成熟してきた点を確認し得た。

第二章では、第Ⅱ部で扱った「きよら／きよげ」が中世王朝物語においてどのような法則で用いられるかを分析した上で、『源氏物語』の中世の写本との連動を見出した。また、付論では、「みるぶさ」という表現の物語における類型性を明らかにした。

以上のような考察により、物語世界がことばによっていかに支えられているか、その一端を読み解いた。